

後

入学試験問題

総合科目Ⅲ

(配点一〇〇点)

平成二十五年三月十三日 九時三〇分～一時三〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があつたら、手をあげて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 四、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
- 五、二枚の解答用紙が渡されるが、解答は、問題ごとに所定の解答用紙に記入しなさい。青色刷りの解答用紙が第一問用、茶色刷りの解答用紙が第二問用です。所定の解答用紙に記入されていない解答は無効です。
- 六、各解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 七、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 一〇、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 一一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

草稿用紙
(切り離さないで用いなさい)

草稿用紙
(切り離さないで用いなさい)

第一問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

世界地図の歴史を眺めた人なら誰でも気づくであろうが、地図の系譜にはひとつの断層がある。中世までの地図と、大航海時代の地図の間にある断層である。大航海時代のポルトラーノ図〔注二〕は極座標〔注二〕表現のように見えるが、やがて現われるメルカトルなどの空間表示と同類の世界の測定に根ざして描かれた地図である。中世の地図も世界の位置関係を無視してはいないが、むしろ世界了解としてのコスモロジーの表現の延長であって、世界のなりたちの意味がえがかれている。好例はT〇図〔注三〕であって、その象徴的手法による地図は世界を意味構築した最高傑作である。以後、このような世界の意味的な了解はついにあらわれない。T〇図あるいはその類型に属する地図がよつてたつ空間は、言うまでもなく求心的な空間であつて、それはギリシヤに結実した空間概念の最後の表出であつた。後にあらわれる地図は、図法に求心性を残してはいても、表現しようとする空間は、あるがままの位置関係であつて、空間は意味から解放されている。世界は意味づけられた関係性ではなくて、測定されるべき対象である。このときすでに世界は、どの部分も歪まない空間の容器に入つており、その容器は座標の役割を果していた。そしてその容器の大きさは、世界を包むに十分の大きさを持つていた。

この容器が天文学的スケールにまで拡大されるのは時間の問題であつた。よく知られているように、測定が可能な空間が次第に鮮明になってくるにつれて、批判の矢面に立たされたのはアリストテレスの空間概念である。それはT〇図や中世キリスト教集落の形成にいたるまで長い射程を誇つていた空間のイメージであつた。世界地図の系譜にみられる断層は、アリストテレスの空間概念の陥没の軌跡であるともいつてよい。もちろん、中世あるいはそれ以前の支配的な空間概念がすべてアリストテレスのそれに収れんするわけではなく、様々な空間のイメージが観念のレヴェルで表示され、たとえば集落形態によつて物象化されている。しかしルネッサンス期、あるいは近代の初源の期間の知性のなした批判は、奇しくもアリストテレス学にむけて求心的に集中された事実をもつてすれば、世界地図の断層をこのように理解するのは、厳密さにおいては難点があるものわかりやすい図式はつくるのである。

アリストテレスの「天体論」に代表される求心的空間のイメージと、「自然学」に代表される場所・運動についての論理によって形成された空間概念を、批判することによって生れてきた空間のイメージが、さしあたりの興味の対象である。アリストテレス批判の内容についてもここでは、マックス・ヤンマー「注四」の優れた研究などに譲るとして、批判の結果だけに注目しても、求心的空間概念の基礎となった諸概念、すなわち場所(トポス)の境界、方向性、円運動、空間の有限性等はほとんど崩壊されてゆく。崩壊の過程は、地図表現のうえではひとつの断層であるが、実際にはかなりの長い時間にわたっている。その崩壊したあとに残された空間を、一言で表現すれば、測定については空間のどの部分をとつても同等な空間であった。

この空間は、やがてデカルトの延長によって鮮明になる。デカルトは、測定性を長さについて一元化した。もし、デカルトが物質の諸性質を同時に表現しようとしたら、またライプニッツの批判に耳を貸して、実体なるものの指摘をまくろんだとしたら、カルテジアン座標「注五」の透明さは表現できなかったにちがいない。デカルトの空間は、まさに宇宙に立体格子の座標系をかけたところに出現する、延長に関してあらゆる空間の部分が等価的な空間であった。アリストテレスの空間概念と対比的に出現したのは、この場所性が排除されたあらゆる部分が等価に見なせそうな空間であった。以後、この空間は物理学の発見によって、単に延長についてだけでなく、様々な現象についても等価性をもち、やがて空間は等質であるとする確信が人々の意識に浸透していったように思われる。少なくとも古典物理学の領域では、空間は、一様で、方向性がなく、連続であり、多くの場合無限であるとみなされていた。幾何学で言えば三次元ユークリッド空間である。

〔中略〕

この空間を基礎として、古典的な自然科学はめざましい展開をみせるのであるが、その著しい特色は事象の記述つまり法則が、事象のある断面を記述するという性格である。これはデカルトの延長による空間の定立の方法の伝統をひいている。より本質的な記述法は様々に探られ、巧妙な方法が発見されてはいるが、あるものを空間に即して全体的に記述する方法はない。たとえば、リングとはいかなるものかを記述するためには、無限の角度から断面をとらえた記述を要する。同様に人間は、と問うても様々に記述されるが、全体的な記述は期待できない。俗に言われるように、ある断面についての測定と関係性の抽出は可能であ

るが、価値は抽出できない。価値判断は実践のレベルにゆだねられる。空間は諸事象を容れてはいるが、事象の原因とはなっていないから、空間は事象の包括者にはなりえていない。空間が、人間的な諸行為を指示することはまずないと考えてよい。

観念のうえでの空間が、人間の行為を指定するといった発想は、いまでは想像もできなくなっているが、かつては空間は場所と意味に即して実際に人間の行動の規範になっていた。近代の古典的な空間のイメージのなかでは、行為の指定から解放されて、実践は自由に組みあげられることを約束された。もし、事象の全体的記述を空間が保証するならば、人間の諸行為もまた空間によって拘束されることになったはずである。近代においては空間がたまたまそうした役割を放棄したと解すべきであつて、空間とは無関係なところで、たとえば人間を、全体的に記述する試みはなされている。

空間の内部で現象する様々の事象のある関係を記述しようとするとき、理想状態を設定して法則性を導く手法を採ることも近代のひとつの特質であろう。それは事象の現実性を回避して、ひとつの標準を表現する方法である。この方法は、空間の絶対性と相似する性質をもっている。理想状態といわずとも、現象を理想化する過程なくしては、自然現象を場所の関数とすることなく普遍的に記述することは不可能である。まず理想化に準拠した表記を手にしてから、具体的な事象にもどつてゆくという手続きをとる。この時自然は観測者とともにあるのではなく、観測者の外に存在する。こうした自然を対象化する手続きは、ニュートンの絶対空間のような空間が現象の背景に厳然と構えていない限り設定できないであろう。

(原広司『空間(機能から様相へ)』より。表記等に若干変更を加えた。)

〔注一〕 ポルトラーノ図 中世の航海図。図中に数力所の方位盤を設定して、そこからの放射状の線で航路の方向を確認できるようにしている。

〔注二〕 極座標 原点からの距離と角度で位置を表す座標表示。

〔注三〕 T O 図 世界が円盤状の大陸として描かれ、地中海を意味するT字によって、上側がアジア、左下側がヨーロッパ、右下側がアフリカの三つに区切られている。

〔注四〕 マックス・ヤンマー ドイツ生まれの科学史家。著書『空間の概念』他。

〔注五〕 カルテジアン座標 直交座標。デカルト座標とも呼ばれる。

問一 空間概念はどのように変化したか。本文を参照し、転換期を特定した後、その前後の内容を説明しなさい(五〇〇字以内)。

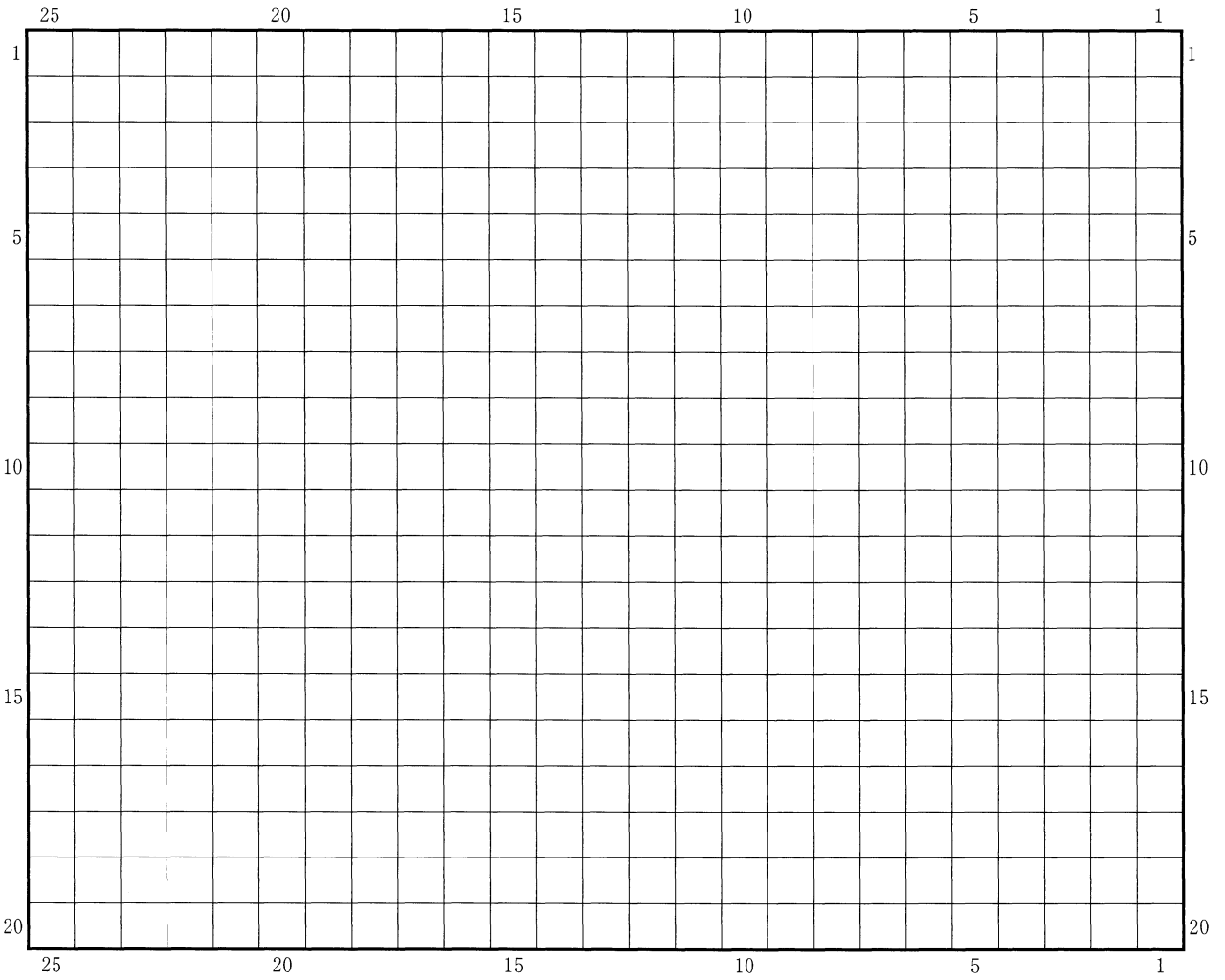
問二 この著者は続けて次のように書いている。

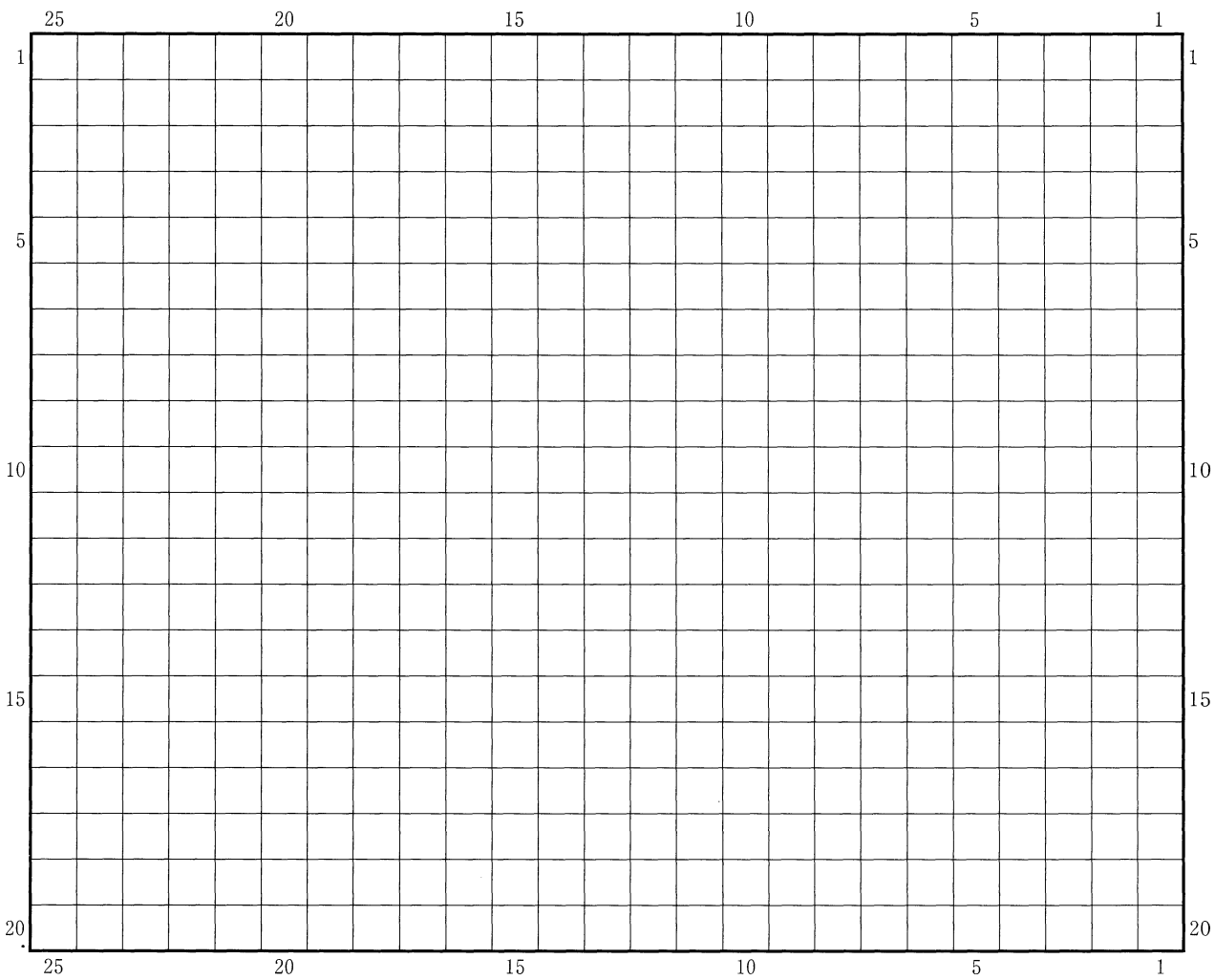
現在私たちは、こうした古典的な空間とはちがった空間のイメージを知っている。たとえば相対論は、もはや絶対的な空間の想定を許していないばかりか、空間が時間の外にあることも許していない。非ユークリッド空間や位相空間も、また場の理論や観測と記述についての理論なども、観念のうえでは多様な空間の様態があり、自然を空間と離れて想起すること自体に誤りのあることが説明されている。現代の最も先端的な部分では、どのような革新的な空間のイメージが用意されているか想像することさえできなくなっている。

この文章は一九七五年に書かれた。それ以降、今日に至るまで、どのような「空間のイメージ」が展開したかについて、社会状況や技術の変化を踏まえながら自己の見解を述べなさい(五〇〇字以内)。

草稿用紙

(切り離さないで用いなさい。)





第二問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

徳川体制の急激な崩壊、その後の全面的かつ徹底的な変革——それは、世界史上特異であり、驚異である。それを体験した人々は、回顧して、「夢のようだ」としばしば語っている。今が現実だとすれば、かつての世は夢としか思えない。それほどの激変だったのである。

十七世紀初頭から二世紀半、数々の飢饉・洪水・大地震・大噴火・疫病、そして、一揆・打壊し・大塩平八郎の乱などを、危なげなく乗り切ってきた体制であった。それが、嘉永六年六月三日（一八五三年七月八日）、四隻の船内二隻は、三本マストの船体の左右に蒸気機関で回転する外輪をも備えた新鋭艦が江戸湾に出現して以来、揺れ始め、やがてぐらぐらと動揺し、ついにはわずか一四年余りで瓦解してしまった。そして、かつての中央政権のみならず、その四年後には武装した地方政権すべてが一掃され（廃藩置県）、速やかに武士身分自体が消滅してしまつたのである。

何故であろうか。

しかも、瓦解直後の慶応四年三月（一八六八年四月）に、満一五歳の天皇が、武家と少数の公家からなる新政府の「国是」として「天地神明ニ誓つた五箇条は次のとおりである。

- 一 広く会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ。
- 一 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フベシ。
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。
- 一 旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。
- 一 智識ヲ世界ニ求め、大ニ皇基ヲ振起スベシ。

一〇年前、五年前には、誰も想像しなかつた「国是」である。そこに「攘夷」論は無い。

いわゆる明治維新は、事前に思い描かれた「理想の美国を打ち建てんとする」「理想的の革命」ではない。さまざまな思惑の諸勢

力の競り合いともみ合いの内に、みるみる急進化し、当事者たちの誰もが当初予想しなかった結末に至った「アナルキカルレボリウシヨ乱世的革命」である（竹越与三郎『新日本史』明治二五年）。

何故、かくも新奇な「国是」を掲げる革命政府が成立したのだろうか。

しかも、その後、革命政府は、実際に大いに「智識ヲ世界ニ求め」、「旧来ノ陋習ヲ破リ」、政治・法制・税制・経済・社会・教育等を根底から覆した。やがて風俗・文化・言語までもが一変した。「上」からの改革に「下」は余り抵抗なく呼応し、「何事も忘れず、何事も学ばず」、ともかく革命以前に戻そうと策動する文字通りの反動派など、明治初年を除き、いなかった。結局はかつての王朝が復辟し、（ブルーストの『失われた時を求めて』の読者なら誰でも知っているように）その後一世紀を経ても、なお貴族の身分意識が強固に存続したフランス革命などと比べ、その結着はまことに鮮やかだった。

何故であろうか。

これを、「開港」による世界貿易の環への参入が既成の社会・政治構造を破壊したなどと説明することはできない。貿易収支はおおむね黒字で、国内は品薄になって物価が上昇するほどだった。国内産業が破壊されるどころか、輸出ブームで大儲けした人々がいたのである。町人・百姓の多くは、武士たちの騒動を傍観し、一方、開港地の新風俗に興味津々だった。当時の西洋人の手記は、いずれも、庶民たちが彼等に友好的だったことを記している。

後世の小説やドラマは、少数の明敏な開明派が、西洋による干渉・侵略・植民地化を避けるためには、天皇を中心とする統治と当の西洋に倣った改革とが必須であることに早くから気付き、しかも、その本音を隠しつつ事態を導いたかのように、往々描く。それは、明治政府指導者にも、「国民」消費用の物語作者にも、都合のよい解釈であろう。しかし、それは事実ではない。事態の推移につれて誰もが意見を変えた。多くは何度も転向した。そのため、（特に陰険だったわけではないのだが）本音が従前の主張と往々ずれた。しかも、明治以降、かつての「攘夷」派も、「佐幕」派も、最終決着に合わせて自分を説明した。それを責める必要はないが、それに安易に乗るわけにはいかない。冷静に見ていこう。

〔中略〕

ペリーは、それまでのラクスマンやレザノフ等と異なり、大胆に江戸湾の奥まで進入し、長崎回航を峻拒し、強引に大統領の要求書を手交した。船の便のために数港を開き、薪水を提供するといった「仁慈」の要求は、実はそれ程の難題ではなかった。その強硬な姿勢こそが、衝撃だった。

水戸の徳川斉昭は、来航後一ヶ月余りの時点で、すでに、「打払の儀御決定に不相成、余り寛宥仁柔の御処置のみにては、下々は御懐合不相分候故、奸民共御威光を不恐、異心を生じ候も難計、国持始め御取締にも拘り候様成行候も難測……」と案じている（老中への建議書。七月一〇日）。「国持」大名以下、「奸民」の注視の下、「御威光」が失墜することを恐れたのである。越前の松平慶永も、「御武徳之衰弱を見透候時は異国は扱置、全国之大小名迄も、如何見取可申哉に而御国地の御政道も是迄之御振合立行兼、足利氏之末世同様にも可有御坐敷と致恐怖候」と述べた（老中宛意見書。八月七日）。

彼が告白しているように、問題だったのは「異国」ではなく、国内だった。「御威光」は海外にも輝いているはずであり、それ故に、その失墜は直ちに国内に波及し、御威光の体制を危機に陥れると直感されたのである。

〔中略〕

これは、徳川家の「御威光」というより、「御国威」の問題だと考えた人々もいた。「万国」に対して日本が向き合っているという意識は稀ではなかったし、かつてのキリシタン一掃を、「国威の海外に震ふこと、また快と称するに足る」（会沢正志齋『新論』文化八／一八一一年）とするような気分もあったからである。彼等は、ハリスの江戸城訪問も、通商条約締結も、外国への屈服であり、それ故に屈辱だと考え、切歯扼腕した。そして、「弱腰」の公儀への不信を強めた。彼等の標語が、水戸学の教典『弘道館記』が家康による「尊王」と並べて「キリシタン排撃を称えて用いた「攘夷」という語だった。

しかし、実際にどうすれば「攘夷」したことになるのか、理解はさまざまだった。条約を破棄して戦い、すべての西洋人を追放

すべきなのか。しかし、負けたらどうするのか。負けないために、西洋の兵器と軍事技術を懸命に学ぶべきなのか。それで「攘夷」と言えるのか。「攘夷」とは、要するに「御国辱」を晴らし、「御国威」を挽回くわんくわんすることであるなら、条約を一旦たんは破棄して、堂々と締結しなおせばよいのか。さらには、通商をしつつ航海術を学んでみずから世界に乗り出せば、それこそが真に「攘夷」したことになるのではないか。

西洋人への激しい嫌悪と憎悪をたぎらせた人々も確かにいた。しかし、西洋人暗殺さえ、実は西洋人よりは政府への抗議の表明だったように見える。その意味では、水戸の武士たちによる大老、井伊直弼すけの殺害と同質である。それらの結果は、「御威光」のさらなる低下だった。しかし、（今や広く「幕府」と呼ばれるようになった）公儀は、外国との妥協による威光の衰退よりも、戦つて負けることによる威光の失墜をより恐れた。そして、始め「攘夷」をしない政府に憤慨した人々は、やがて「攘夷」のできない政府を軽蔑した。そして、ついにはただ政府を苦しめ、打倒するための手段として「攘夷」を利用した。

慶応四年（九月に明治と変えた年である）二月、天皇が新政府を代表して西洋諸国の外交官と初会見した日の朝、五年余り前、島津久光の軍勢と共に江戸に勅使として乗り込んで高飛車に「外夷掃攘」を迫った公家の大原重徳は、こう述懐したという。

私の考へには、御一新前、朝廷攘夷を専ら被為とら唱候は、畢竟徳川家兵馬の権及天下の政務を被為とら執度との思召にて、徳川家を潰す為めに攘夷を被為唱候て、御一新と相成候以来は、俄に外国人謁見も始まるといへば、余り忽然こつ反対の御処置にして、徳川家に被為た対候ても、余り御不義理なり、（松平慶永『逸事史補』）

さすがの彼も、今となつてみれば、「徳川家を潰す為めに攘夷を」「唱」えたと見えることを自覚し、きまりが悪かつたのであろう。しかも、西洋に何らかの優位を認め、その西洋に対抗するためにも一層西洋に学ぶべきだという議論が有力になり、「攘夷」論が空洞化する基盤は、かねてからあった。

やがて、かつての「攘夷」の「志士」たちは新政府の指導者として、洋服を着、断髪し、当時の西洋人男性を真似て一斉に髭ひげをはやし、「文明開化」を主導した。文字通りの「攘夷」を信じた人々からすれば、革命は完全に裏切られたのである。

（渡辺浩『日本政治思想史』より。表記等に若干変更を加えた。）

問一 幕末から明治維新に至る歴史を、重要な出来事に触れながら説明しなさい(五〇〇字以内)。

問二 著者が明治維新は「乱世的革命」であり、文字どおりの「攘夷」を信じた人々からすれば、革命は完全に裏切られたと論じる理由を、明治維新がさまざまな階層に与えた影響に注目しながら、考察しなさい(五〇〇字以内)。

草稿用紙
(切り離さないで用いなさい)

草稿用紙

(切り離さないで用いなさい。)

